
君と見た虹を忘れない

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と見た虹を忘れない

【Nコード】

N0111B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

失恋した男と女が屋上で知り合って虹を見る。その虹をたよりに2人は再び再会する。傷つく心を癒しあう2人のラブストーリー。

きれいな景色を眺められる唯一の安楽の場所。

屋上。

「この大空に♪翼を広げ♪飛んでゆきたいよ♪」

昼休みにここで景色を眺めながら歌を歌うのがあたしの好きなこと。
誰もいないし、ほんと気楽。

教室には・・・あんまりいたくないしね。

「きれいな歌声だね」

「えっ」

声がした方を向いてみた。

男の子が1人立っていた。

「雨やんで良かった。今日は屋上に来たかったから」

まさか人がいたなんて・・・

恥ずかしー！！！！

「ごめんっ・・・まさかいるなんて思わなくて！」

「なんで？別にいいと思うけど」

そして彼は付け加えて言う。

「・・・今の僕の心を癒すには」

あたしはその言葉にきよんとする。

彼ははっと気づいて、誤魔化すかのようにニコツと笑った。

「僕、新一。君は？」

「あ、あたしは椿。ねえなにかあったの？」

思わず聞いてみた。

彼はまた少しだけ苦笑してみせた。

「・・・教室にいたくないんだ。付き合ってた子に裏切られてさ」

「えっ」

「二股かけられてたんだ。気づいてたけど・・・彼女の僕への気持ち
ちは嘘じゃないって信じてたかった」

言葉が出ない。

「昼休みに彼女とその男が僕んちクラスでご飯食べてるんだ。・・・
まいったね」

ははっと笑う彼に、親近感を覚えずにはいられなかった。

「あたしも」

だって、同じなんだもの。

「あたしも彼氏に裏切られた。勉強頑張りたいからって言って別れ

たのに、ほんとは・・・」

ほんとはあたしの友達と付き合うための口実だった。
嘘をつかれたことがさらに悔しくてたまらない。

だから教室にいたくない。

そんな2人を見てると嫌なことを言ってしまうそうになるから。

「じゃあ僕たち同じだね」

忘れなきゃいけない。

もう過去のことなんだって割り切らなくちゃいけないの。

「そうだね」

だけど、そんなことが可能だと思う？

「新一・・・くんは許せるの？」

あたし、許せないよ。

あたしの知らないところで勝手にになにかが始まって、結局あたしが
邪魔者になって。

「許せないかな」

「じゃあなんで笑ってられるの?!」

笑えない。

少なくともその2人の前では。

「だって、それでも僕は彼女が幸せになってほしくて、いつか自分

が幸せになる日がくるのを待っていたいから」

雨がやんで太陽がサンサンと照らしてくる。
まぶしい。

「僕たちだって幸せになる権利はあるもんね」

そして彼はまたニコツと笑う。
つられてあたしも微笑んでしまうんだ。

「なれるかな」

そうつぶやくと、彼は「もちろんなれるよ」と言ってくれた。

「あ、虹！」

「ほんとだ。そっか、さっきまで雨降ってたんだもんね」
「きれー・・・」

あの虹のようにきれいな心でありたいって思う。
そう教えてくれたのは新一くんだった。

翌日。

今日の昼休み、屋上へ行っただけど新一くんはいなかった。

なんとなく会いたくなって思ったのになあ。
教室にもあんましいたくないし・・・

「椿・・・」

座りながら外の景色を眺めてるあたしに、理恵が話しかけてきた。

「・・・理恵」

理恵はあたしの友達で、元彼の今カノ。
元彼も一緒にきている。

「あの・・・あたしたち・・・」

なに？

なにがしたいの？2人そろって。

嫌がらせ？

「ごめんなさいっ」

「え」

理恵が頭を下げた。

「あたしたちほんと無神経だったよね・・・ずっと謝るタイミング
がなくて」

「俺も・・・だましてごめん」

あたしは、なんて言えば良いの？

だってもう終わったことなんだよ。今更そんな・・・

あ、そっか。

もう『終わったこと』なんだ。

もう忘れて良いことなんだ。

「良いよ、もう」

あたしは笑ってそう言ってみせた。

「ありがとう・・・」

理恵は泣きながらあたしに抱きついてきた。

だって、新一くんが言ったから。

あたしたちにも幸せがくるからって、だから待つてなきゃいけないんだって。

だからもう過去のことは終わらせなきゃいけないから。

「ねえ、新一って人知らない？」

「あたしは知らないな」

「俺も」

「そっか・・・」

新一くんに報告したかったのにな。

あたし新一くんのクラスも名字もなにも知らない。

ただ屋上で出会っただけで。

なんでだろ・・・

なんでこんな気持ちになるんだろう。

もう新一くんに会えないんだって思うと、切なくなる・・・

それから一週間以上が過ぎた。

一向に新一くんの居場所はわからない。

この学校広すぎて、探すのもなかなか大変。

「あれ」

玄関の前に人だかりができていた。

「ね、理恵。あれなにな？」

「ああ、あれ？あれねー絵画だよ。一週間くらい前に絵画コンクールがあったらしくて、それで入賞したんだって」

「へえ」

あたしには無縁だな。

だって絵下手だし。笑

「でもねー変なの」

「変？」

「あの絵画の題名『君と見た虹を忘れない』なのに、屋上と青空しか書いてないもの」

えっ・・・

「人も虹も書いてないのにねーw」

「それって・・・」

あたしは淡い期待を持って、その人だかりに入っていた。

「『君と見た虹を忘れない』・・・藍原新一・・・」

あたしはその絵を見て確信した。

絶対に新一くんだと。

あたしはその足で屋上へ向かった。

もしかしたらいるかもしれない。

もしかしたらまた会えるかもしれない。

期待とともに屋上へ駆けていく。

息をきらしながら屋上のドアを開けた。

「久しぶり」

そこには、あのときと変わらない笑顔の新一くんがいた。

「絵見てくれたんだ」

「うっうん」

まさかまた会えるなんて・・・

夢じゃないよね？

「あれから気になってたんだ。どうしてるかなって」

あたしもいっぱい言いたいことあるよ。

仲直りしたこととか新一くん探してたこととか・・・

でも声に出せない。

「頑張ってる？」

一度深呼吸をして、話し出した。

「あたしね・・・」

新一くんはあたしの話を全部聞いてくれた。

そしてやっぱり笑ってくれるんだ。

「新一くんが教えてくれたから頑張れたんだよ」

また会えて良かった。

新一くんの笑顔はあたしの心を和らげてくれるんだ。

「僕ね、もう一度一緒に見たかったんだ。君がきれいだった虹を」

「うん」

「だから絵に描いたんだ」

青いよく晴れた空。

今度はいつ雨が降るんだろうって2人で予想する。

そして雨がやんだた一緒にここで、また一緒に虹を見るんだろうな
って思うと胸がドキドキするんだ。

「じゃあまた見よう」

そんな近い未来を夢見て。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n01111b/>

君と見た虹を忘れない

2010年11月20日06時38分発行